

雪下

作品集1 サンプル

水澤雪下

雪下——作品集1 サンプル

目次

道の人 …………… 3

道
の
人

あの方の話をしろとおっしゃるのですか、わたくしに？ それはもう、あの方のことなら、どんなことでもつい昨日のこのように覚えております。わたくしにとつてそのすべてがなつかしく、美しい思い出です。わたくしはいまもそれを大切に胸にしまっております。そうしてくり返し思い出してはこの年老いた胸を温めているのです。

どこからお話したものでしょう。あの方が生きていた時分から、もうずいぶんな月日が流れましたから、世の中も変わっていることでしょうし、当時の常識が通用しないなどということも大いにあるそうです。が、それは必要に迫られたときにおいおいお話しすることにして、やはりわたくしの生まれたときのことからはじめたほうがよさそうに思われます。

思えば不思議な因縁でございました。前世でなにか特別のご縁があったのでしょうか、わたくしはあの方と同じ年にこの世に生を受けた……正確に云えば、わたくしはあの方がお生まれになるほんのひと月ばかり前にこの世に生まれてきたのでした。

わたくしは真っ白な、毛並みの美しい馬でした。生まれてきたわたくしをひと目見て、その場にいた馬丁は、これは特別な馬だと思ったようです。そこにはふたりの馬丁がいたのですが、彼らは互いにうなずきあって、ひとまずわたくしが正常に立ち上がれるかどうか見守ることに決めたようでした。

母馬が鼻面をやさしく押しつけてわたくしの体を舐め、ところどころにつついていた羊膜をと

り去って、立ち上がるように励まします。わたくしは弱々しい四本の脚を精一杯に踏んばって、よろめきながらもなんとか立ち上がろうと頑張ります。母馬はわたくしを見つめ、馬丁ふたりもちょっと興奮した面持ちでわたくしを見ています。

一度目は立ち上がったもののよろめいて、ぺたんど尻餅をついてしまいました。母馬がわたくしを舐めて励ましてくれ、馬丁は握りこぶしを握りしめて、頑張れ頑張れとわたくしを応援してくれます。しばらくのち、わたくしはよろめきながらもどうにか立ち上がり、ちよこちよこと二、三歩跳ねるように歩きました。

そこへ馬丁が近寄ってきてわたくしの全身を調べ、またも顔を見合わせて満足げにうなずきました。わたくしは見知らぬ人間にいきなり体を押さえられ、あちこちなで回されて、ほんとうはこわかったのですが、母馬がなにも云いませんし警戒するそぶりも見せないのです、これはおとなしくしているべきなのだと思って、黙ってされるままになっていました。馬丁のふたりはわたくしのそうした態度にも満足したようでした。

その馬丁というのは、ひとりは少し歳のいった、がに股気味の小柄な男で、もうひとりはその若い、背はあまり高くないけれどもすらりとした痩せ型の男でした。どうやら親子のようでしたが、このとき年のいったほうが若いのにやら目配せし、若いのはうなずいて小走りに厩を出てゆきました。わたくしはぶるぶる震えながら母馬の腹に寄りそって、四つ脚をいっぱい踏んばって立っていました。それからまたちよこちよこと歩き、歩いては休み、母馬のところへ戻ってお乳を飲んだりなどしておりますと、最前出ていった若い馬丁が戻ってきました。

馬丁はうやうやしく頭を下げ、どなたか偉いお方をお迎えするようでした。わたくしが不思議に思つてそちらをふり返つてみますと、ちょうどそこへ、あの方のお父上であるシュッドーダナ王と、そのお妃が厩へ入つてこられたのです。

「これがその馬でございます」

と馬丁がおふたりにわたくしを指さして話しはじめます。

「ぶちのひとつもない、みごとな雄の白馬でございます。体も丈夫そのもので、どこにも異常はございません。もう少ししたらあたりを走りまわりますでしょう。人を怖がりもせず、勇敢で従順なたちのようでございます。じつによい子馬でございます。このような馬はめつたに生まれるものもございません」

若い馬丁はまるで自分が産みでもしたかのように、もう得意になつてわたくしのことを話すのです。王はわたくしをしげしげと眺め、顔じゆうに喜びをたたえてお妃のほうをふり返り、こうおっしゃいました。

「どうだ、マールヤーよ、立派な子馬ではないか。じつに美しい毛並みではないか。これは吉兆である。わたしは思う。きつとわたしたちの子も、このように立派で姿の美しい、たくましい子に違いない。そしてきつと男の子であろう。心配することはないぞ、マールヤーよ。おまえはきつと丈夫な子を産み、その子の母となつて、わたしとふたりで末永くその子の成長を見守るのだ」

こう云われたお妃は、なるほどお腹が大きくふくれて、もう臨月なのであります。ですがその顔は青白く、体も痩せていて、いかにも弱つておられるようでした。聡明そうな美しい方でしたが、

丈夫に生まれついたとはとてもいえないようでした。人間にはこういうことがあまりわからないようですが、そのお顔には死相がはつきりと表れておりました。わたくしはそれにおびえてしまつて、思わず母馬のお腹にびったりと自分の体を押しつけたことです。

が、お妃のマーヤー夫人は夫を心配させまいと無理にも笑つて、生まれてくる子はきつとこの馬のように丈夫で美しい男の子でしょうと請け合いました。

「わたくしにはわかるのです。わたくしは感じます……この子はいへんな子です。なにか特別なものをもつた子なのです……わたくしは自分の命に替えても、この子を無事に健康に産んでやらねばと思うのです。それを自分の使命のように感じるのです」

夫人はそう云つて、そつと夫にもたれかかりました。その目はじつとわたくしに注がれておりましたが、深い慈しみと、同じく深い悲しみとであふれていました。夫人はこのときすでに、自分がきつとお産に耐えられないということを知っていたのです。おそらくは、わが子を身ごもつたときから薄々わかつていたのでしょう。それから何ヶ月ものあいだ、自分のなかの新しい生命に、みずからの生命を注ぎこんできたに違いないのです。

このときのマーヤー夫人はそれは静かな、悲しくやさしいけれども同時に威厳に満ちたお顔をなさっていました。その目はなにか、自分の生命のはるか向こうを見ているようでした。

「この子馬を、生まれた子どもにやってください」
と夫人は王にお願いしました。

「そしてその子に名前をつけさせ、世話をさせて、その子だけの馬にしてやってください。きつと

この子馬は、生まれてくる子のよい友たちになるでしょう」

そう云って、夫人は自分のお腹を見つめてなでさすりました。

「よしよし、そうしよう。この子馬のために、立派な厩を用意しよう。子どももきつとこの馬を気に入るだろう。そしていつの日か、この馬を美しく飾り、この馬に乗って大地を駆け、旅をする日も来ることだろう。わたしのいいつけで他国へ出向くこともきつとあろう。わたしはここに宣言しよう。この馬は生まれてくるわたしたちの息子のもの、わたしの跡取りのもの。そのつもりで、おまえたちひとつよく面倒を見てくれよ」

王がこう高らかに宣言すると、馬丁の親子はそろって深々と頭を下げたのでした。

このようなしで、わたくしはあの方のものになりました。マーヤー夫人の云いつけどおり、わたくしは名前もつけられず、真つさらな状態のまま、特別に用意された厩へ移されたのでした。それは広々と大きく、なめらかに磨かれた新しい木材のかぐわしい香りがして、金具や飾りなどはすべて黄金でできているのです。まさに花厩ともいふべき、なんともみごとな厩でございました。あのような環境で暮らすことのできる馬は、そうありますまい。

わたくしはそのみごとな厩で、ほとんど王子そのもののように育てられたのです。とある大臣が、これはやりすぎというものだどわたくしは思いますけれども、この馬は生まれてくる王子のものであるからして、そのつもりで王子のように扱えという旨のお説教を、ふんぞりかえってあの馬丁親子にしたものですから、そしてまたこの親子というのが正直な人たちだったものですから、わたく

しを壊れ物のように扱って、たいそう丁寧にしてくれました。

わたくしが生まれてひと月ほどしますと、今度はあの方が、わたくしの生涯ただひとりの主人であるあの方がお生まれになりました。そしてそのお母さま、マージャー夫人は、やはり出産からほどなく、疲れきって息を引きとられたのです。わたくしはたびたび、マージャー夫人のあのやさしくも厳しいまなざしを思い出して、なにか打たれたような気持ちになったものです。そして生まれてすぐに母親というものをなくしてしまった、まだ見ぬわたくしの主人のことを思いました。

ところでわたくしは、これから先もあの方のことを単に「あの方」とお呼びしようと思いません。あの方に対しては、皆さまそれぞれになにかしらの印象や想像している姿などがありでしょう。あの方をどう呼ぶかということについても、人によっていろいろと違いがあることと 생각합니다。俗名でお呼びするのもひとつの手なのですが、わたくしにとつてあの方は、やっぱり心をこめて「あの方」とお呼びするほうがふさわしいように思うのです。

さて、わたくしはじめてあの方にお目にかかったのは、それから何ヶ月かのちのことです。あの方は、マージャー夫人の妹御、プラジャーパティー夫人に抱かれて、シュッドーダナ王と一緒にわたくしの厩へやってきたのでした。

王があの方を抱き上げて、わたくしのところへ近づいてきます。そして最初に王ご自身で手を伸ばしてわたくしの頭をなで、鼻面をなでて、こわいものではないと示してから、赤ん坊のあの方をそっとわたくしのほうへ差しだしました。

あの方はしばらく不思議そうな顔でわたくしを見つめておられました。それから手足をちよつと

ばたつかせましたので、王はあの方の小さな手をおくるみから出してやり、ご自分の手で支えて、わたくしのほうに差しをばすようにされました。

小さなかわいらしい手がわたくしの毛並みに触れ、あの方はちょっとまばたきをなさいました。それからこの手に触れるものの感触がいかに不思議だというように、ご自分の手を見つめたり、わたくしの眉間のあたりを何度もなでさすったり、毛をつかんでみたりしていましたが、やがてきやつきやと笑って、両手でわたくしの顔をぺたぺたとなで回しはじめたのです。

「これはおまえの馬なのだぞ、シッタールタよ、これはおまえの乗り物なのだ。いつの日かおまえはこれを乗りまわし、国土を隅々までめぐって、人々の心を知り、その置かれた状況をよく知って、もののわかった、立派な王になるのだ」

王はあの方を揺さぶってあやしなからこのように云いきかせ、あの方は微笑んでおられました。わたくしはいまでもときどき、あのとときあの方はなにを見て、なにを笑っておられたのだろうかと考えることがあります。もちろん、まだ赤ん坊ですもの、なにか考えていたなどということはないのでしょうか、それでもわたくしにはこのときの光景が、妙に印象的なものとして頭に焼きついて離れないのです。

あの方は結局、シュッドーダナ王の期待されたような意味での王にはなりませんでした。でも、あの方は人々の心というものをつかんで支配してしまっただけといえないでしょうか。なにかほとんど致命的とさえいえるような、決定的な意味で、人々のあり方や生き方というようなものを決めてしまったのだといえないでしょうか。そのような意味で、あの方は確かに王であったように思います。

そのお生まれが意味する以上の王であつたように思います。

二

ぜひにとおっしゃいますから、またお話の続きをいたしましょう。そこでひとつお断りしておきたいのですが、もちろん皆さまはあの方のことをいろいろな点でよくご存じでしょう。あの方の生涯については、いくつもの書物に書かれているということですし、そうしたものを熱心に研究する方もいるという話です。あるいはまた、あの方を心の底から尊敬し、人間の偉大なお手本として仰いでいるという方もおられることでしょう。

しかしわたくしはそうした人間の側の事情については暗いものですから、ときおり皆さまにとつて思いもかけないようなことを申し上げるかもしれません。自分の思い描いている印象とはだいぶ異なるぞと思われることもあるかもしれません。が、わたくしとしては、わたくしの見聞きしてきたことをなるべく正確にお伝えするように努めているつもりです。たとえなにか思わぬ食い違いがありましても、そのときはそういうものかと思つて、わたくしの話を信じるなり、やはりご自分の印象のほうを大切にされるなり、していただければいいのです。

さて、あの方はカピラ城の第一王子としてお生まれになったのですが、ここでいささかわずらわしいのを承知で、カピラヴァストゥという国のことやその周辺の国々のことについて、少しご紹介しておかねばならないと思います。

皆さまは雪山とも呼ばれる、かの大山脈をご存じでしょう。てっぺんに雪を頂いた、峻厳な山々が連なるその山脈のふもと一帯には肥沃な平野が開けており、カピラヴァストゥはその平野のなかの、もっとも山脈寄りの側に位置しております。河川が多く流れ、土地は滋味豊かで、米や野菜、果物などの豊富な実りをもたらします。人々は温厚で穏やか、実に気前がよく、あまり争いごとを好みませんが、自由というものをなによりも重んずる独立心の強い一面も持ちあわせております。

このカピラヴァストゥは、シャーキャ族、またはシャカ族などと呼ばれたりもしますが、そのシャーキャ一族の国家であり、いまの言葉でいえば部族国家ということになりましょうか。一族は各地に点在してそれぞれに首長である王を立て、独立した国家を営んでおりました。しかし互いによく行き来し、相互の婚姻などもさかんに行われていますから、特に王族などはみな親戚のようなものでした。

カピラヴァストゥは規模としてはそれほど大きな国ではなく、また大都市というようなものも持ちあわせていませんでしたが、近隣を見渡してみれば、西に強大なコーサラ国があり、南にもまた大国であるヴァツジー国やマガダ国があります。これらの国はいずれも大都市をいくつも抱え、人口や物資や軍の規模などで周辺の小国群をはるかにしのいでいました。いずれの国も国力がほぼ拮抗していたために、長らく大きな争いが起こることもなく均衡を保っておりましたが、このころマガダ国に傑出した王が何代かたて続けに出て、国はにわかには富み、その富に惹かれて人々が集まり、他国から頭ひとつ抜け出たような格好になったのです。

コーサラ国ではこれを警戒しおそれました。そしてともすれば周辺諸国を征服、併合してでも、

マガダ国に対抗しようとする動きを見せはじめたのです。コーサラ国は歴史的にも地理的にもカピラヴァストゥと関わりの深い国ですが、これまではあからさまに刃向かいでもしないかぎりは、いかに小国といえども一応は尊重して、自由にさせてくれていたのです。かつては自由と独立とを賭けた血なまぐさい争いがくり広げられた時期もありましたが、ここ二十年ほどのあいだは比較的平穩な日々が続いていたのです。それが急にこんなきな臭い動きへの対応をせまられることになり、諸国の王や臣下は動揺を隠せませんでした。

こうした情勢の変化は、人々の暮らしにも微妙な影を落とします。特にあの方はこのような時期に一国の第一王子としてお生まれになったのですから、それは否応なくあの方の成長にも一種の陰影を与えることになったのでした。

しかしその一方で、あの方が次期国王として、また亡きマヤー夫人の忘れ形見として、いかに大切に育てられたかもまた、想像に難くないと思います。シュッドーダナ王のわが子への愛情はたとえようもないほど深く、しかもあの方がマヤー夫人の面影を受けついで、たいそう美しく、しなやかに成長してゆくのをご覧になるにつれ、王の息子への愛情と亡き王妃への思慕は深まるばかりでした。

王は情に篤い方で、一度心を開き関係を深めた者を、薄情にも忘れ去るなどということのできないお方でした。その情の深さがときおり王を苦しめることにもなるのでしたが、マヤー夫人の妹御、プラジャーパティー夫人が、そうした王のお心をよく察してなぐさめておられました。

プラジャーパティー夫人は、マヤー夫人亡きあと、しだいに姉上に代わって王の精神的情緒的

な支えとなり、王のよき伴侶となったのでした。

夫人は外見はそれほど姉上に似ていたというわけではありません。おふたりとも美しい方でしたが、どちらかというとその見た目は正反対のようだったのでして、マール夫人が線が細く繊細で、なにか壊れやすくはかなげな美しさというようなものを漂わせていた方だったとすれば、ブラジャーパティー夫人は肉付きがよく健康的で、太陽のように陽気な、みずみずしい輝きにあふれたお方でした。ちよつとやそつとのことではへこたれず、なにごともしもよいほうにとらえて、時間がかかってもきつとすべてが最後にはよくなると思っておられました。

この夫人の明るい性格が、マール夫人の不在を補い、おかげでシュッドーダナ王もとかく暗くなりがちな時期をどうにかやりすごすことができたのです。夫人の存在はまた、あの方にとつてもかけがえのないものでした。明るくよくよしない夫人は、よくくよくよするあの方を笑ってなぐさめ、たとえいつときでも、そんなことは大したことではないのだと思わせてくれるのです。

夫人はのちに王とのあいだにご自分の子をもうけたのですが、あの方が少しでも継母に差別されたなどと感じることのないように、いつも気を配っておいででした。それに夫人はあの方の繊細な性格に、どこか亡き姉上を重ねていたようなふしがあります。その姉の忘れ形見を大切に育てるところこそ、姉への最大の供養になると夫人は信じておられたのです。

このような方々に見守られて、あの方はすくすくと大きくなりました。そうして三歳になったころ、あの方ははじめてわたくしの背にお乗りになったのです。

皆さまが普段から馬というものに親しんでおられるかどうかわかりませんが、われわれ馬が人間

のいいなりに右を向いたり左を向いたり、走ったり止まったり、果ては柵を跳び越えたりなどするのをご覧になって、馬というものはなんと頭のいい、従順な生き物であろうと思われるのではないのでしょうか。

ですがいかにわたくしどもといえども、あのように人間と一心同体となって動けるようになるまではないぶんな手間ひまがかかるのでして、ほとんど生まれたときからその訓練がはじまっているのです。なによりもまず人間に慣れなければいけません。人を見て怖がっているようではいけないのですが、これは馬にとつて決して自然なことではありません。生まれたときから馬丁などがまわりにいて、あちこち触られたり世話をされたりしているおかげで、わたくしどもは人が怖いものでなく、よき相棒であるということを学ぶのです。

そうして人に慣れてゆきまして、今度は人の云うことをきいて動く練習がはじまるのですが、この段階になって、わたくしの世話を任されたあの馬丁親子は、かわいそうにほとほと困り果ててしまったのです。そうでしょう。わたくしは王子のように扱わねばならないことになっているのですから。どこの国に王子を押さえつけてハミをはませたり、横腹を蹴ったり鞭打ったりする家来がいるでしょう。ふたりとも、まったく頭を抱えてしまったことでした。

それでも親子はどうにか訓練をつけて、わたくしに人の指示に従うことを覚えさせ、発進や停止やささまざまな合図を覚えこませました。あの方もちょうど三つにおなりで、そろそろ頃合いだろうということになり、ある日ついにわたくしのところへ連れてこられたのです。

シュッドーダナ王があの方を抱き上げ、おそろおそろわたくしの上に座らせませす。あの方は急に

視界が高く広くなつたのに目を丸くして、きゃっきやと笑い、はしゃぎはじめます。王はわが子が転げ落ちたりしないように両手で脇をしっかりと押さえています。息子の馬丁が手綱を握って合図を出し、わたくしはゆっくりと歩きはじめます。あの方は面白がつてきゃあきゃあ声を上げ、手を叩いたり身をよじったりなさいます。王はそのたびにぎくりとし、よほど緊張しているのかももう少し汗をかいていらっしやいます。手綱を握る馬丁も気が気でないらしく、しょっちゅう後ろをふり返って小さな王子を見ては、また前を向いてわたくしの進行方向を確かめるというようなことをやっています。

わたくしは馬丁の命じるままにゆっくりとあたりを一周し、止まりました。王はふうーっと大きなため息をおつきになり、わが子を抱え上げて地面に降ろすと、額の汗を拭きました。馬丁もようやく息がつけたようでした。わたくしは目の前に生えていた草を食みはじめましたが、その鼻面の横にあの方がやってきてきたりと座りこみ、にこにこしながらわたくしの草を食むのを見ているのです。そしてわたくしの顎や口もとに手をやって、わたくしがもぐもぐと口を動かすのを手のひら越しにじつと感じておられました。

うっかりして指など噛まれてはいかんぞ、と王が心配そうにおっしゃいましたが、あの方は少しも怖がつていないようでした。なにかわたくしを通じて、生命の営みとでもいうようなものを、感じとっておられるらしく見えました。

それからあの方は乗馬というものにすっかり魅了されてしまったようです。しよちゆう「うま、うま」といつてわたくしを呼び、わたくしのところへ連れて行くように、乳母やお付きの者にせが

んだそうです。首尾よくわたくしの背中におさまりますと、もうにこにこ満面の笑みを浮かべて、わたくしのたてがみをつかんだり、足をばたばたさせたりしてお喜びでした。わたくしが馬丁の合図でそろそろと歩きはじめますと、あの方はきゃあつと声を上げてお喜びになり、ぱちぱち手を叩いて、それはもうたいへんなはしゃぎようでした。

そのうちに、いつも乗る白い馬が自分の馬であるということも覚えたようで、

「馬の名前はなんというの」

と、これはだいぶ言葉が話せるようになってからのことですが、わたくしを指さして若い馬丁に訊ねました。

「名前はまだないのでございます」

と馬丁は答えました。

「これはあなたさまのお馬でございますから、あなたさまがおつけになるまで、誰も名前をつけないで待っているのですでございます」

「ふうん」

あの方は唇を突き出して考えこむような顔をなさいました。自分には馬に名前をつける仕事があるのだということを、思い巡らしているようなお顔でした。それからいつものようにわたくしの体をなではじめたのですが、その手つきや顔つきには、なんともいいようなない感慨のようなものがこめられておりました。なにかがほんとうに自分のものである、自分だけのものである、ということがもたらす喜びに、浸っておられるようでした。

考えてみますと、あんな純粋な所有の喜びに浸ることができたのは、あの方にとってこれが最初で最後ではなかったかと思えます。もう何年か経ちますと、あの方の胸はもうそんな純粋な喜びを感じするには、あまりに複雑になってしまわれましたから。

しかしその純粋だったあいだに、あの方はわたくしの名を懸命に考えてくださったのでした。あでもないこうでもないといって、どんな名前がわたくしにふさわしいか、小さな頭を振ってあれこれ悩まれたことです。何ヶ月も考えてくださったことです。そしてある日とうとう、あの方は目を輝かせてわたくしのもとへ走ってこられました。

「カンタカだ！ おまえはカンタカだよ！」

とあの方は走りながら叫びました。

「ぼくやつとわかつたんだ、おまえの名前はね、カンタカというんだよ」

あの方はなにか重大な秘密でも打ち明けるように、わたくしの耳に口をつけてこうささやいたのです。

いったい、どれほど深く深いところから、あの方はそれを見つけ出してきてくださったことでしょうか。

三

このことを思い返すといつも笑ってしまうのですが、これもまたあの方の不思議な魅力のひとつ

で、実はあの方はおそろしく不器用な方なのです。

これも乗馬に関する話なのですが、だいたい乗馬などというものは、馬のわたくしが申すのもなんですけれども、要は人間がどのようににしたいか、それをどのようにに馬に伝えるかということでしょう。ですから、人間のほうで変におろされますと馬も困るのです。行きたいのはこっちのほうだとはっきり決めてしまつて、それを遠慮会釈なく命じてくだされば、わたくしどもも非常に気が楽なのです。

ところがわたくしのご主人は、この一見簡単なことがなかなかどうしてお出来にならないのです。あの方が六つになつたころでしたか、ついにひとり馬に乗つてもよいとお許しが出たのですが、あの方はそれを聞くとすぐさまわたくしのところへやつてきて、馬丁の手を借りてわたくしの背によじ登りました。そうして、馬を操るためにはどうすればいいか、馬丁の説明を熱心にお聞きになりました。

さあやってみようということ、馬丁が手綱をあの方の手に握らせ、少し離れて見守るような格好になりました。そうして馬と自分とふたりきりにされたたん、あの方は熱烈な気持ちもどこへやら、ふと不安に駆られたのです。

いえ、不安という言葉が正しいかどうか、正確には、いざ手綱を握つてわたくしとふたりきりになりますと、あの方はもう自分の興奮だとか馬を乗りまわしたいなどという気持ちがどこかへ行つてしまつて、わたくしのことと頭をいっぱいにしてしまつたのです。

あの方を何度かお乗せしているうちにわたくしも次第にわかつてきたのですが、これはあの方の

もって生まれたくせのようなもので、あの方は他人の存在というものに、どうも必要以上に敏感な方だったのです。まわりに自分以外の人がいると思うと、あの方はもうそれにすっかり気をとられてしまつて、ご自分というものがどこかへ行つてしまふのです。このくせは人でも馬でも同じように發揮されるらしくて、わたくしの背に乗つたとたん、あの方はもう自分のことなどそつちのけで、わたくしの気持ちばかり考えようとなさるのです。

このくせはなかなか厄介な問題を生みました。わたくしにしてみれば、行けという命令をくださなければ、いつまでもつ立つて待つております。そのように訓練されておりますし、命令を待つあいだ、ほんとはあっちへ行つて草を食べたいのだがなどと思つてはいるわけではないのです。背中に誰か乗つたとたん、わたくしの考えることはただひとつで、背中に乗つた方の指示に従うというだけです。

こうした心持ちのことは、もしかすると人間にはなかなかおわかりにならないのかもしれない。特にあの方のように、いつもいろいろな感じや感情や考えなどで頭をいっぱいしておられる方ですと、ほかの者もついそのようなものと思つてしまふのでしよう。そして自分のことなどどこへやら、他人の考えのほうを尊重せねば気がすまぬような気持ちになつてくるのです。それでそつとわたくしの顔色をうかがい、わたくしがなにを考えているものか、いま行けという命令を出してもいいのかどうか、わたくしの機嫌をそねたりしないだろうかなどと、別ににも思つてなどない長い鼻面を眺めて考えこんでしまふのです。

こうしてあの方はわたくしの背中でひどく思いつめたような顔をしたまま、もうどうしていいか

わからなくなってしまうれます。いつまで待っても合図を出さないものですから、そのうちに馬丁がしびれを切らして、もし若さま、このようにトンと横腹を蹴ればカンタカは歩き出しますよ、馬というのは頑丈ですから少しくらい大げさに蹴ったっていいのです、止まれの合図はおわかりですか、こうくいっと手綱を引きましてカンタカの頭を止めるようにするのです、わたくしが見ておられますから、こわいことはございません、これは頭のいい馬ですから、急にわけもなく走り出したりなど決していたしません、危ない目に遭うようなわけはございませんよ、などと、くどくどとささやく羽目になるのです。

もちろん、そんなことはあの方だって百も承知なのです。あの方の気にしておられたのはそこではないのですが、馬丁親子にはそれがどうしても理解できませんでした。あの方はこれぞいぶらん長いこと手こずったので、若いほうの馬丁が、かわいそうに若さまはちと頭が弱いのではないかなどと、父親に話したのも無理はないのです。

「だって、ぼくおまえとどうやったら話せるかわからないんだもの」

とあの方はある日、さんざんわたくしの上で馬丁にああだこうだと云われたあとで、こう漏らしました。

「おまえの気持ちもわからないのに、自分の気持ちだけで行けだの止まれだのって、そんなこと、ぼくできない」

わたくしはこれを聞いてなんだか胸がいっぱいになってしまいました。自分が言葉を話せないことを、このときほどつらく思ったことはありません。わたくしはどれほど、カンタカはなんとも思

つていやしません、わたくしはあなたさまの乗り物なのでございますから、あなたさまの意志をのぞいて、わたくしの意志などというものはございませんですと、こう云ってさしあげたかったことでしょう。

こうしたことは、ずいぶんと子どももつぼくてばかばかしいことと皆さまお考えになるでしょうか。そうかもしれません。実際人間の子どもも多くは、このような考えを子ども時代に置き去りにして大きくなるのかもしれませんが、あの方はいつまでも、いくつになられても、不思議とどこかこのときの気持ちのままに、体だけ大きくなったような感じが抜けませんでした。このときあの方は、わたくしと気持ちが通じないことを齒がゆいようにおっしゃいましたけれど、わたくしはむしろこのような気持ちをなくしてしまうから、人は人以外のものと心が通わなくなるのだと思います。

あの方が、なんの遠慮もなしにわたくしを乗り回せるようになるまでには、それからなおかなりの時間がかかりました。でも時間というのは尊いものですね。あの方は時間とともに少しずつ、馬というものが人間とは少し違うこと、必ずしも人間が思うようなことを、馬が思うわけではないのだというようなことを、理解していったのでした。

このように時間をかけることができたのは、プラジャーパティー夫人のお力がやはり大きかったように思います。夫人は、もしや息子はほんとうに少し足りないのだろうかなどと悩みはじめたシユッドーダナ王に向かつて、

「なにおおっしゃるの、子どもというものは、そう大人が思うようにひよいひよいものごとを片づけるわけにいかないのですわ」

とおっしゃって、王の心配を笑い飛ばしてしまったことでした。

四

このあいだはあの方が、乗馬についてずいぶん苦勞なされた話をしましたが、それについて、忘れられない出来事がひとつございます。あれはあの方が十三歳のときのことでした。あの方の従兄弟にデーヴァダッタ王子という方がおられることは、皆さますでにご存じかもしれません。デーヴァダッタ王子もずいぶん複雑な方でしたから、どうも後生に混乱が生じたと見えて、中にはずいぶん口さがないようなことを書いている書物もあると聞きます。そのデーヴァダッタ王子が、この出来事に関係してくるのです。

そのころ、デーヴァダッタ王子はご両親と一緒にカピラ城に滞在されていました。シュッドーナ王のごきょうだいはみな仲がよく、しょっちゅうあっちの城へ行ったりむこうがこっちへ出向いたりというようなことをやっておられたのですが、このときは皆さまが家族連れでカピラ城へ遊びに来ておられました。

デーヴァダッタ王子はあの方と同じ年でしたが、小さなころから人一倍体が大きく、たいへん勝ち気で活発な方で、そのころにはもう大人に交じって狩りに打ち興じたりしておられたそうです。乗馬もたいへん巧みで、弓を扱うのもうまく、劍を握らせても、相撲をとらせても、親戚じゅうの子は誰ひとり太刀打ちできませんでした。

もちろん、おとなしいシッタールタ王子などとても相手になりません。片手でわけなくひと捻りというようなもので、遊びでもなんでもあの方は軽く負かされて、すぐごと引き下がるのがおちでした。それにあの方は、生来競争や力比べなど苦手なたちでしたから、勝負好き競い好きのデーヴァダッタ王子を前にしては、どうにも落ちつかない、くつろげない気がしたでしょう。

そんなわけですから、デーヴァダッタ王子がシッタールタ王子をばかにしているのも無理はなかったのです。あんなひ弱な愚図がおれにかなうわけがないと威張っていらしたのもまことに無理からぬものがあつたので、デーヴァダッタ王子はあの方をどうでもいい子分のひとりのようにみなしておいででした。そして平氣であの方のものをとったり壊したり、気に入らないことがあると突き飛ばしたりするのです。

しかしデーヴァダッタ王子がこのように少々思い上がったお子さまになったのも、なにも本人だけが悪いのではないので、一部にはお母さまの阿米タ夫人があんまりわが子がかわいく、あんまりわが子を焚きつけるからなのです。

阿米タ夫人というのは、これがまた負けん気の強いお方で、いつでもわが子が一番でなければ気のすまない方でした。デーヴァダッタ王子が親戚じゅう向かうところ敵なしのお子さまであれば、阿米タ夫人はまったく上機嫌で、息子を猫かわいがりしております。ところが、たとえほんのわずかでも誰かほかの子が褒められたり、デーヴァダッタ王子よりも出来がよいように云われますと、阿米タ夫人はもうむしゃくしゃして、なんとか自分の息子のほうが上だと認めさせようとして、おかしいほどがむしゃらになるのです。

そういうとき、アマタ夫人は息子に向かつて、わたしはくやしくてならないよ、あんな子をおまえより出来がいいように云われてなるものか、おまえのほうが上なのだということを見せつけておやり、などとデーヴァダッタ王子をけしかけるのです。すると王子はにやにや笑いながら、大丈夫あんなやつやつつけてやりますから、などと云うのです。そうしてたいいの場合、実際にやつつけてしまうのでした。

アマタ夫人がこんなご気性でしたから、ご婦人がたはみんな心得ていて、夫人の前で余計なことを云わないように気をくばっていたのです。でも、酒に酔って気も大きくなった殿方が、息子の自慢話のひとつもしないですむでしょうか。だいたいシュッドーダナ王のご兄弟というのは、そろいもそろって豪傑ばかりで、腕がちぎれそうになったの首を落としそうになったのと、物騒な話を自慢げに披露して、子どものように喜んでおられるような方々でした。集まれば酒を飲んでそんな話に花を咲かせるものですから、シュッドーダナ王がついつり込まれて、近ごろ息子の馬術がだいぶ上達し、このあいだはこんな崖を飛び越えてきたなどと、つい少し大げさに話してしまったのも無理はないのです。

こんな話はそもそもその場を沸かせるかぎりのもので、わざわざあとから蒸し返すようなものでもないと思いますが、しかしアマタ夫人の夫というのが、これはまたずいぶんのんきなと申しますか、実に鷹揚な、こう云ってよければ鈍い方だったのでして、ついなにかの折にその話を夫人にしてみました。

こんなことを聞かされては、もう黙っていられないのがアマタ夫人です。想像するに、つかつか

と息子のところへ行きまして、おまえはあんな弱々しい子に馬術で負けてもいいのですかなどと云って、デーヴァダッタ王子を脅したに違いないのです。王子にしてみれば寝耳に水というもので、気弱でなんにもできないやつと見下していたシッダールタが、よりによって馬に乗って崖を飛び越えるなどという手柄を立てたというのですから、すっかり平静ではいられなくなりましたに違いありません。おそらくデーヴァダッタ王子の中に、シッダールタ王子に対する憎しみにも似た対抗心がむらむらと湧いてきたことでしょう。

ところでそのシッダールタ王子は、確かにわたくしに乗って崖を飛び越えたのです。その日あの方はわたくしを川辺に連れ出して、浅瀬に飛び出た岩の上を渡ったりして遊んでおられましたが、そのうちに川の上流のほうへ行ってみようという気を起こされて、わたくしを駆って川沿いをずっと走ってゆかれました。そうして山の中へ入ってゆき、割れた岩山のあいだから水が滝となって流れ出ているところにたどり着きました。あの方はその滝の上を、こちらから向こうへ飛んだのです。その幅はわたくしの身長ほどもありましたろうか、一間ほどの広さで、たわいない冒険ですが、シッダードーナ王は息子の成長をお喜びになりました。そうしてつい、少々誇張して話してしまっただというわけです。

ところがデーヴァダッタ王子はそんなこととは知りませんから、その話を聞いたあと、すぐにごかへいなくなってしまうたらしく、一日じゅう姿を見せませんでした。

その晩のことです。わたくしが厩で寝ておりますと、なにやら人の話し声が聞こえ、誰かがこちらへやってくる気配がします。わたくしが首をもたげ、気配をうかがっておりますと、それはあの

方とデーヴァダッタ王子でした。おふたりは連れだつてわたくしのところへやってきたのです。

「さあ、シッダールタ」

と厩の扉を開き、わたくしのところへ歩いてきて、デーヴァダッタ王子はこう云いました。

「ふたりも同じ条件で挑めるように、どちらもこの馬に乗ることにしよう。といっても、これはおまえの馬だから、おまえのほうが多少有利には違いない。順番はそのときになつたらくじ引きかなにかで決めることにしたいと思うが、とにかくおれたちは、あの城の裏手にある山に登つて、山のとつぺんにある崖のこつちと向こうとにわかれるんだ。先にやるほうが馬を連れていくことにして、崖についたら、この馬であの崖を飛び越える。うまく飛び越えられたら、馬はもうひとりがついていてる側に来ることだから、今度はそいつが崖の向こうに向かつて同じように飛び越えるんだ。これはおれとおまえとの勝負だ。付き添いや立会人はなし、全部ふたりきりで、不正もごまかしもいっさいなしでやるんだぞ。どうだ、シッダールタ、おまえはこの挑戦を受けるか」

話を聞いて、わたくしは身震いがしました。デーヴァダッタ王子のおっしゃるその裏山のとつぺんにある崖というのは、おそらくもとはひとつの巨大な岩山だったものが、その先端が長年の風雨にさらされてふたつに割れてしまい、二本の長い角のように山頂に突き出しているのです。そしてその角と角とのあいだの広さは、優に三間を超えるほどはあります。

こんなところを飛び越えるというのですから、正気の沙汰ではありません。どうやらその日一日かかつて、デーヴァダッタ王子はこの勝負にふさわしい崖というものを探し求めてきたようですが、よりによってこんなに条件の厳しいところを選ばなくたってよさそうなものです。それに、いかに

体の発達したデーヴァダッタ王子とて、こんなことはそう簡単にできはしないはずです。まさか、王子はお互いできっこないのを承知の上で、あの方を先に飛ばせて殺してしまおうというようなつもりではないかしらと、わたくしはついそんなことまで考えました。

あの方は、この話を聞くと驚いたような顔になり、次いで唇を噛んで、暗い顔で考えこんでしまわれました。

「そんなことを急に云われても、すぐに返事をするわけにはいかないよ、デーヴァダッタ」
とあの方は云いました。

「返事をする前に、よく考えてみなければ。明日一日だけ時間をおくれよ。よく考えて、きつと明日じゆうに返事をするから」

「よし、きつとだぞ」

デーヴァダッタ王子は挑むような顔で、シッタールタ王子をにらみながら云いました。このときちょうど雲間から出てきた月の光が厩の中へ差しこんで、デーヴァダッタ王子の顔を青白く照らしました。それは子どもながらに、なんとも鬼気迫るようなすごいお顔でした。その目は燃えるようでした。こんなやつに負けてなるものかという、烈しい意地のようなのが燃え上がっておりました。しかし同時にその底には、なにかぞつとするほど冷ややかな、氷のように冷たいものが横たわっているのです。

「おまえの返事がいいえなら、この話はすっかりなしだ。でもおまえがこの挑戦を受けるなら、あさつての午後、おれたちはあの山に登ることにしよう。そしてこの馬に乗って勝負するんだ。いい

な、きつとだぞ」

云いながら、デーヴァダッタ王子はわたくしの鼻先をむんずとつかんで引き倒すようなそぶりをしました。わたくしは驚いて声を上げそうになり、あの方も思わずわたくしを助けようと腕を伸ばされましたが、デーヴァダッタ王子はあざ笑うかのようにさっと手を離して、そのまま厩を出いてしまいました。

「ああ、カンタカ、たいへんなことになった」

あの方は青い顔をして云いました。

「ぼくはどうしたらいいだろう。こんな挑戦を受ける義理なんかないんだけど、こうなったのも元はといえば、ぼくが少しばかり冒険したのを、お父さまを喜ばせたいばかりに云いふらしたからだ。あんなこと得意げになって云うのじゃなかった。こういう加減というのは難しいんだね、カンタカ。ああぼくはどうしたらいいだろう」

シッタールタ王子は青い顔をわたくしの横腹に押しつけて、じっと目を閉じて考えこんでしまわれました。

「申し出を断って、デーヴァダッタに臆病者、弱虫とののしられるのは簡単だ。そんなこと、ぼくはちつとも気にならない。それもまんざらうそじゃないんだもの。でもこの先デーヴァダッタが、こんな無理なことをほかの子たちに対してもくり返すようなことになったら、それはやっぱり問題だ。きつとデーヴァダッタは、ぼくが断ると高をくくっているんだ。そしてこのままいけば、きつとその通りになるんだ。でも、でも……ねえカンタカ、正直に云うよ。ぼくはそれじゃあなんだか

いやなんだ。そんなことぼくはいやだ。でも別に、自分の評判だとか、体裁だとかを気にするんじゃないんだ。そうじゃなくて……でも、これもやっぱりぼくの自尊心というやつなのかしら。そうかもしれないね」

そう云って、あの方は寂しそうに笑いました。それから急に気をとり直したように、「なあカンタカ、明日ちよつと遠出につきあつておくれよ。その崖つてやつを見に行つてみよう。そうしてから決めても遅くはないよ」

とこうおっしゃつて、わたくしの鼻をいたわるようになで、厩を出てゆかれました。

翌日、朝早くにあの方はわたくしのところへやつてきて、わたくしを牽き出し、ご自分で馬具をつけてわたくしに飛び乗りました。

「さあ、カンタカ、ひと仕事頼むよ。あの裏山のとっぺんまでは、ぼくたちまだ一度か二度行ったことがあるきりだね。難しい道だから、気をつけておくれよ」

あの方はそうおっしゃつて、わたくしのお腹をやさしくトンと足先でひと蹴りし、わたくしは歩きはじめました。

カピラ城は峻険な岩山を背に建てられており、その山がいわば背面を守る自然の要塞となつて、お城の守りをさらに堅牢なものにしておりました。わたくしはお城の裏手に広がる雑木林を抜け、狭い山道に入つてゆきました。ほとんど獣道のような道で、左右には背の高い草や木々が鬱蒼と生い茂り、見通しはひどく悪く、なんとも薄暗いのです。それを辛抱してしばらく登つてゆくと、し

だいに草木の丈が減じて視界が開け、ごつごつした岩山が肌をあらわすのです。

「こんなところを、デーヴァダッタはひとり登ったのかしら」

あの方は感心したようにそうつぶやいて、考えこむような顔をなさいました。

「デーヴァダッタは昨日、こんなふうにはひとりきりで、具合のいい崖を探して歩きまわったのかしら。勇気のあるやつだ。どんな気持ちでやったにしても、とにかく勇気のあるやつだ」

そこから先は石ころだらけの細くけわしい道が続き、岩肌に沿って道がつけてありましたが、それがまたわたくしがようやく通れるような細さで、ちよつとでも足を踏み外そうものならもう下めがけて真つ逆さまといった具合で、まったく身もすくむような道のりでございました。

ようよう山頂に出まして、問題の二本の角のような崖のところへ出ましたが、向こう岸とのあいだをひと目見たときには、わたくしはまったくぞつととしてしまいました。その距離は、やはり優に三間はあり、ほとんどわたくしの身長四倍近くありました。首を伸ばして下を覗いてみれば、切り立った岩壁のはるか下に、すり鉢の底のような谷底が見えます。もちろん落ちればひとたまりもないでしょう。いくらわたくしが元気で健康な馬とはいえ、これを飛び越えろというのはちよつと難しい相談のように思えました。

あの方はわたくしから降りて崖に近づいてゆき、しばらくのあいだ距離を測るかのようじつと対岸を見定めていました。折しも日輪がわたくしたちのちようど背中の方角から、天の頂点めがけて昇ってきていました。崖を見つめるあの方の前には濃い影ができておりました。少し後ろにいたわたくしの前にも真つ黒な影ができておりました。それがなにか不気味なものを暗示するようで

たくしはこわかったのですが、そのときふとあの方が、なにか覚悟を決めたような顔でわたくしを
ふり返りました。

「どうだろう、カンタカ、おまえはこれを飛び越えることができると思うかい。ぼくは以前、同胞
を五頭並べたのを飛び越えたという馬の話聞いたことがある。若い雄の馬だという話だった。で
もその馬は単に無鉄砲なだけのやつだったのかもしれないし、おまえをそんなのと一緒にするわけ
にいかないかもしれないけど、どうだい、馬のおまえから見て、この崖はなんとか越えられそうだ
と思うかどうか」

そうおっしゃって、あの方は少し後ろに下がり、わたくしに前に出てみるようながしました。
わたくしはおそるおそる崖のふちへ身を乗り出し、向こう岸を見ました。それから後ろを向いて、
少し歩いて行ってみました。

さいわいなことに、助走する距離は十分にとることができるように見えます。少し傾斜がついて
いるのですが、やりにくいというほどではありませんでしたし、走るに邪魔な突起した岩や灌木の
ようなものもありません。確かにたいした挑戦ですが、同胞を五頭飛び越えたという馬がいるなら、
わたくしにもやってやれないことはないかもしれないと思えてきました。そう思いはじめたとたん、
わたくしの体がその予感に応じるように、この未知の挑戦に向かってうずきはじめるのを感じまし
た。

もちろんわたくしは、挑戦と聞くやただちに鼻息を荒くするような性格ではありません。無鉄砲
は勇敢さとは違います。わたくしはいま、わたくしの主人からほんものの勇気を求められているの

だと思いました。潔く引くことも、進み出ることもできる勇気をです。あの方もそれを奮い立たせておられるのだと思いました。その少し青ざめているけれど、同時に覚悟を決めたようになりしいお顔の中に、わたくしはそれを見ました。そしてわたくしも覚悟を決めたのです。

わたくしは首を高くもたげ、ひと声いななきました。わたくしの主人には、それで十分なのでした。あの方はいなくわたくしを見上げてうなずき、もう一度向こう岸を見やって、またひとつうなずきました。

「よし、ぼくはおまえを信じる。デーヴァダッタに挑戦を受けると云うよ。そして明日の午後は、きつとふたりでこの崖を飛び越えてみせよう」

あの方はそう云うと、もうぐずぐずせずわたくしにさつと飛び乗って、山道を引き返してゆきました。帰りの道中、あの方はなにもおっしゃいませませんでした。わたくしも鳴いたりはいたしませんでした。ふたりして、ただ静かな覚悟を胸中にみなぎらせ、蓄えることに専念しておりました。

夜が明け、ついに挑戦の日がやってまいりました。わたくしはすっかりそのつもりで、湧き上がる武者震いを抑えながらじつと厩で待っております。ところが昼前に、もうあの方がわたくしのところへ顔を出したのです。

「あのねえカンタカ」

あの方は苦笑いを浮かべながらおっしゃいました。

「どういうわけだか、お父さまにばれてしまったんだ。お父さまは、そんなばかな企ては許可する

わけにいかないといって、ぼくを叱ったよ。ぼく、ほっとしたやら、どことなく悔しいやら、なんだか気が抜けてしまった。おまえもきつとがっかりするだろうね。でも、とにかくそういうことなんだ。お父さまはどうしてこのことを知ったんだろう。きつとぼくやデーヴァダッタのふるまいで、なにか感づかれたのだろうね。そう考えると、ぼくたちまだまだだねえ。悪巧みにも修行が必要だつてこと、ぼく、よくわかったよ」

あの方はそう云ってお笑いになり、なぐさめるようにわたくしの首を叩いて、お城へお戻りになったことです。

わたくしもほっとするやら、なんとなく気をくじかれたような気がするやら、しばらくぼうっとしてしまいました。が、午後になって、今度はデーヴァダッタ王子が足音をぬすんでわたくしの厩に忍びこんで来られたのです。

「ふん、シッダールタのやつ、昨日は挑戦を受けるなんて調子のいいこと云っておきながら、怖じ気づいて親父に泣きついたに違いないさ」

デーヴァダッタ王子はひどく怒って、唇をゆがめ、顔を真っ赤にしてわたくしをにらみつけるのです。

「あの腰抜けめ、いい子ぶるしか能のない、女みたいな弱っちいやつめ。あいつのせいで、おれは恥をかいた。お母さまも恥をかかされたんだ。ちくしょう！」

こうデーヴァダッタ王子はまくしたてたのですが、その早口に怒鳴るのを聞いておりますと、どうも次のような次第だったようです。

その日の朝、朝食のあとで、デーヴァダッタ王子はシュッドーダナ王に呼ばれました。王のもとへ行きますと、王はそこに座れと云って、自分の向かいの椅子を指さします。王子がそこへ腰をかけますと、王はつくづくと彼を眺めて、口を開きました。

「デーヴァダッタよ。どうもそなたは勇敢さや誇り、功名心といったものについて、ひどく思い違いをしているようだ。今日そなたがシッダールタとなにをしようと企んでいるのか、ほんとうのところをわたしは知らぬ。が、おおよその想像はつくように思う。そなたに云いたいのは、たとえそのようなことをやつてのけたとしても、そなたにとつてもシッダールタにとつても、なんの手柄にもならぬということだ。手柄にならぬどころか、そんなことはまったく無意味なことだ」

シュッドーダナ王はここで居住まいを正し、顔つきを少しけわしくなさいました。

「今日のことは、さしあたってわたしひとりの胸に秘めておく。そのかわり、わたしがいま云つたことをよく考えてみるのだ。わかつたね」

王は目つきで部屋を出てゆくよう促し、デーヴァダッタ王子はそのようにしました。悲しく、むしろくしゃして、やりきれない気持ちで、王子は午前中を過ごし、昼食もろろく喉を通らなかつたようです。そうしてふと気がつくと、城を忍び出て、わたくしの厩へと向かつていたのです。

ところがわたくしの厩というのは、馬丁親子がしじゅう出入りして、あたりをうろつくものですから、王子もなかなかわたくしに近づくことができせん。近くの植木のかげに身を潜めて、じりじりしながら長いこと待たねばなりませんでした。そしてようやく隙についてわたくしに近づくことができたというわけです。

「さあ来い、このばか馬め。なんだおまえみたいなやつ。おれがものの道理ってものをわからしてやるんだ」

デーヴァダッタ王子はそう云って、わたくしをぐいぐい牽いてゆき、わたくしに飛び乗って、力まかせに腹を蹴りつけました。

「さあ走れ、走れったら！ そうだどんどん走れ、全力で走るんだ！ 倒れるまで走るんだ、倒れたって走るんだ！ おれが命令するかぎり走り続けるんだぞ！ こんちくしょう！ なんだおまえなんか！ シツダールタのやつなんか！ みんな死んじまえばいいんだ、おれをばかにしやがって！」

デーヴァダッタ王子はこのように、まるで山賊かなにかのように口汚くわめき散らし、わたくしをめちゃくちゃに鞭で打ち、蹴ったり叩いたり、心臓が破裂するほど走らせたりしました。わたくしはもうどうなることかと生きた心地がしませんでしたけれど、こんなこと、あの方がこれまでデーヴァダッタ王子のために我慢なさってきた数々のことを思えばなんでもないのです。

デーヴァダッタ王子は今日のこの日まで、まったくあの方を見下しておりました。小突いたり突き飛ばしたり、大事にしていたものを壊したり、ずいぶん乱暴なことをしたものでしたが、あの方はじっと悲しげな目で王子を見つめて、なにもおっしゃらないのです。それどころか、デーヴァダッタ王子をかばうようなことをなさるのでした。

「あの子の心の中はどんなにつらいんだろう。ぼく、わかる気がする」

とあの方はわたくしに頬を寄せておっしゃったのです。そのときあの方はまだずいぶん小さかったのですが、もうそうしたことがおわかりだったのです。

そしてこの日、燃える怒りのかたまりのようなデーヴァダッタ王子を背中に乗せてはじめて、わたくしにもあの方のおっしゃることの意味がわかったように思いました。

ああ、あわれなデーヴァダッタ王子！ わたくしはめちやくちやに走らされながら思いました。やつとわたくしに乗れたというのに、わたくしに対してこんなふるまいしかお出来にならないとは！ というのもわたくしこそは、あの方の持ちものの中で、デーヴァダッタ王子が今日まで手出しできなかった唯一のものでしたのです。

デーヴァダッタ王子は、あの方の持ちものはなんでも自分のものになければ気がすみませんでした。あの方だけでなく、親戚じゅうの子のものはみんな自分が好きにできるのだといわんばかりに、あつちから取りあげたりこつちで壊したりしておりましたが、さすがのデーヴァダッタ王子も、馬丁の管理する馬のわたくしにはおいそれと手が出せませんでした。またあの方も、さすがにわたくしに他人を乗せることだけは、どんなに頼まれても承知しませんでした。けれどもデーヴァダッタ王子は昔から、このわたくしをほかのなによりも欲しかったのです。

王子はいつも、わたくしに乗って走るあの方をうらやましくてたまらないといった目で見つめておりました。小さなころには、自分もあの馬がほしいと泣きわめき、あの馬と一緒に帰らないなどと云って、ずいぶんご両親を困らせたのです。さすがに少し大きくなるとそんな真似はしなくなりましたが、しかしその目はいつもわたくしを追いかけておりました。ときにはわたくしの厩のまわりを長いことうろついて、なんとかあの馬に乗れないかと隙をうかがっていたのをわたくしは知っております。

それほど乗ってみたかった、自分のものにしたくてたまらなかつた馬ですのに、王子は楽しんで乗るどころか、その心は憎しみでいっぱい、わたくしやあの方への怒りで燃えているのです。そうしてわたくしをかわいがるところか鞭で打ち、満足するどころかますますなにかに飢えてゆくよなのです。

わたくしは悲しくなりました。ただただ悲しくなりました。わたくしは泣きました。デーヴァダッタ王子のために泣きました。なにもそんな思いをして生きないでもよさそうなものなのに、なんというあわれなお方なのでしょう。なんという不幸な性格に生まれついておられるのでしょうか。でも、それはご本人にもどうにもできないことなのでしょう。わたくしはそれをただ悲しく、あわれなことに思いました。

わたくしの上でさんざん暴れまわっていた王子でしたが、やがて怒るのにも疲れたと見えて、わたくしを乗り捨て、どこかへ行ってしまいました。わたくしはくたびれ果ててとぼとぼと歩いて帰りましたが、その途中で、青い顔をしてわたくしを探しまわる馬丁親子に出くわしました。

「おお、カンタカ、こんなところにいたか、無事だったか」

若いほうの馬丁が、わたくしにあわてて駆け寄ってきます。

「どこか怪我はないか、悪さをされていないか。おれとしたことが、気をつけていたつもりだったのに、ちよつと目を離れた隙におまえを連れ出されちゃった。まったく生きた空がなかったよ。ほんとうにおまえが無事でよかった。さあ家に帰って、悪いところがないかよくあらためてみよう」
このとき父親のほうもようやく息子を追いつきまして、ふたりしてわたくしを挟むようにして連

れ帰ってくれたことです。歩きながらわたくしが思いましたのは、デーヴァダッタ王子はただの一度も、この馬丁親子のような人間に会ったことがないのかもしれないことでした。あるいは出会っていても気がつかないのでしょうか。このような人たちが身近にいれば、デーヴァダッタ王子も、なにもあそこまで思いつめる必要はなさそうに思われてなりませんでした。

ところでデーヴァダッタ王子は、あの方がシュッドーダナ王に告げ口したに違いないと頭から決めてしまっていましたけれど、わたくしの考えでは、なにかおかしいと気がついたのはおそらくこの馬丁親子ではなかったかと思えます。あの方の様子やわたくしの様子などから、親子はなにか妙なことが持ち上がっているのではないかと疑って、王にお知らせしたのでしよう。それを受けて王はいろいろと考えをめぐらせ、夫人からデーヴァダッタ王子やアマタ夫人の人柄などをそれとなく聞き出したりなどして、おおよその見当をつけたのではなかったのでしょうか。

それから数日後のことですが、シュッドーダナ王がひょっこりわたくしのところへおいでになりました。そしてわたくしをなにかしみじみと見つめて、

「なあカンタカよ、ものごとをあんまり競争せずに考えると困ったものだな」
とおっしゃって、首を振っておられました。

雪下——作品集1 サンプル

二〇二二年十一月二日 初版発行

作者 水澤雪下

連絡先 <https://mjibms.com/>

内容の無断転載、加工、再配布を固く禁じます。